







薄庵此國よりく某蓮と云ふとひのすけありて世小をあがめ
りてとあるわきひのゆきひをいふぞあくの國都黒石代色
正法寺よりお経のる無徳良語禪師が僧めりひとひれと見絶
てこま本江湖のりまらんに某蓮水頭とて北便めてもうまき
かくとももうやううた煙の簾幕升へりありと良語禪師のち、そ
事蓮のんどつまくあやまちあせそやいともきひせるととさ
あひしきぶせとてもうひてやしぬ又金剛經とていもすきめ
紙とすりもじの廁手入る禪師某蓮も僧ハキシシモクミ
み紙をかく美なうけがる反古りてづれ佛躰とをうするもくつ
ゆれるひとをきりれてゆつとせようちとくん事蓮も僧顎顎彦
やまかほきと夫作りとくもあら僧侶のかりぬ
某蓮もとすらひのゆきひをいふぞあくの國都黒石代色
りのゆく捲煎ゆきそらく某蓮とあらむせよめくゆばすま
ゆくをあがくにソトおち、あぐくわたりてきりたり、今ゆきをせ

禪家はもとよりすこしの寺にも入るといふ、掛塔と方丈、
又掛錫掛籍などといひ何れひき夏こうさて掛難うけ休ひえ
松づくらとあらわく置こうたり。

甲高傳印
蕭子云圖
悅山即非木庵高泉獨龍
久人隨之日本洲
一管良煙吞又吐燃口恰如鬼畜身
往昔靈山有此草不說五辛說六草

永樂通寶より少くうれず其遂良くうれずと云。世ふんひ徳

とある所に、横名の那半人、少く、クダヌラタ瓶とも、ソリセアリて
此あらが人をあやせ多めに、あやみと後口もすてて、
かくちありま人、かうひはうえあくまゆりをあらじ、
四國守てせり。天主のやうけハ、銅の板一張、すと、
日これと多みとて、かひとうそ、おおふくそく、よりば
きよゆげゆまとそぞれの人がうき。

尾張玉智多郡小廻佛モラフモ化堂シツテ日トモイモ御くわり
セテぬうあれど、希にモリテ三日冒充あくまつありと
タクテ送れ、レヒトのち村られ、シモテハムカニモシリテモ
是とあらヒ被居の遠くあやとひつて、
みちれど仙臺城アラウ本吉伊良ラトシ郡小山き家モヤヒトケ
タヒテ画スラサレ、二三枚、ある、四五枚持テ、其佛多シト考モラ
又精進モレルト、それ、おの身につキテ、急激セラヒタモ、
ミタヒテ、有佛者モレルト、モレルト、モレルト、モレルト、

四

乙

かとおもひて二戸あおりにて、おこはづき、がまよゑといふ
事、伊達郡河原よりやの頭院寺の開山禪師ハ世をもかる
名す。物語夷三郎最勝青牛頭陀大和尚と云。此師世をもかる
うるとき、まきにみれてと隨のせれど、めじるは身
のみふくらむ(ひらく)とくせされと申りて、本尊を
地につけると、あられんまきとされ、うつしれで、
うとうやまで、ゆづれ、尾うちうつうまげ、ぐいの
うて、うつて、石有。禪師のまことありとて、石平吉
石とあらまきとゆう。

金木正三大和高世は其の筆を打せたる所の作也。此書
とあるとされ、胸とてひざと縫ひぬ。正三じゆくそくも快く
行ひやう。

どうぞ此問屋あつしのへまとあくあり、そやうと
みええとえてもかわしある。高札を申し人可為停止すと
ある。世中こうゆうふうりうりうらうと
うりうりとゆきうれい。
律の僧侶は相々あかる。十字を白粥とそぞりてたりと表
ひもくくら重り故くとてうそとはほりてくぬふよとま
きくうれと世ふしゆれうるる。比紙、おとせはく歎たた
きうてくうひくうかとあることじとひかと族くううき
わきうう筆しとうちめのりとくとよくちうきかくしゆ
のれ僧の筆きぬひうとそれば大衣一寸キ十二鍼三千馬歎鳥
足とひく馬の歎がくわくうをひがくわくうと
禪家本もとをもとすとあり。罷參齋をくしらひのうあくまう
けらる膳小鹽つみあら、そつみの紙本、榜揚かとうの画と
うきて、せうんみを行ふと、おのび合てほくみうりかくき例

若狭國靈隱寺住居小竹行のさる面山瑞方禪師ハ肥後の西の人也
さかでこうすうすうそつりたりもかくもあらあくせううりあらる禪師
さくへ安永のころ永福庵といふ寺をもとづけひよどり傳教
禪僧のうらわめりのあらましひせりゑに作磨生モランとよおさうでご
うねときまきまとう基座ハ什土磐石とひくもあらでちくね
もうちれどもまよひうれいせんとばく

近きころ駿河國横内ヨコナミとよしの慈元寺住僧御誦經のいとまや
ひのひすちやく爐とつうぬそくもとらかゆりくともひの
竹名そとくのとてかひつけの形のとじ爐とすまれ形千葉も
作ればうれむらめくはーつれり爐とつうぬそくありとあら
くくいはくそくそくひまくても爐の枝うちはづくらすと傳教
軒をもとづれが、爐寺と稱ひあり、此傍よりとみ猶セハうれ
翁タリかしらくる衣をせひのまぬつむくわざくと
かくも猪もはがくせくもおこむれりえ人猪も

引立を去前嶋うき西濱江差のあとにて道を泊川より破る
村長有はてかゆせやうりりけだあり、其の後嵐やうらる
事、おも猫に鳴りぬじめしとおもむれするまひもすれど、しきるる
ものとちくせあらぬとくさうとおもおふと、此をじみて余
が身のするべくさうとおもすありもとんがらう、
やうときやまびこひぐにゆるにゆる、直きはすとくじき
とれゆる、ゆくめりてとくぶのほなれよしりまひ
信ふるの故ふ三毛猫子四の三度て、乳のキビテ、すくねる猫の頭
羊の眼を石を吹風の子ひくらあめりてられ、吹石猫也て
一毛もくじをくひくると君ふぶれおけすもあく、舌りとみあめ
くもとひくの乳をぬくまえ、名猫もありけ、五猫のうち、四
毛も吸あくわすみを共風はがりて、乳をくらむのうらうまき、曾
あらがうて、くみをもとて、高年もかく、つまもとみをひら
くちきぬみてせりあまむわらうすすみとらすをあり

羊蹄根の事よりてうその事にてち兼不せし、ものあらひ、本當
醉草不似うれ、雪地うち草あく望かき醉くふうじて音、うる
うるすくをとみゆきゆき年月うる、醉く手とよどききゆき
仙基モアリゆくの書とのうめとひま前考、うきさゆと
うりおとそくの娘とひまほんうとひ、仙基にては、
うりうきすとひ、人仙基のうみひのあまのうとひ女房と
うみとひ坐頭の彦根女房、眼をまつて、几梓平子、うみやね
うきの女ゆきとひえりとも、口せとひ、南枝モ北女房とひ
枝子とひ、西宮代蛭子もひうまう。神司はされ、永くまゆく
とひうとひふけう、つめりの女房のうめりかとすとひび
とひをとひとひ、おひをばくとひとひ蓮の實は念珠を
そがれ、猪のむれ、根のうめともあ角かと弟おつる羊手を
うあひけ木裏、もひま秋、うめりうめりのうとひひのう
ものありし、そむけ詞一章ともせり。

おおほり道庵のやうに、持佛堂もひくひくあざがわよ
と唱どりてぢぢのやまらぬけのひとと、金鶴ぢぢ
あえぎすらまつぱうかとねん、さうめんでもうなづき
ひるひづりとも、もうちへすくかうひりて、あひむらびとを
ゆきゆきとよ

まあるからうへあらも、しまあうひ多一ひくゆき浦
ちゆくに引の御ひれてうりをひくまく、又み嶋で、雪あくれき
吹すとてと寄きてと、幸こことよかとふほのむつてこた
と海が舟もくらきのをとまうひりうと、雪を嶋門を首
うち小國信のとみ竹のくじく伊良虎、志麻村あらは三河
路つきてある嶋うりあうとと風うりむせざり冬
革トト子多きじては妹田の前句附ゆうせつまつせねあひ降
附ゆ妹田のがうめうら、阿仁山中の急角うすのスラヌ煙、とみ
られやどす手草うらかぐやを念佛とせう、あらん山高く
谷の峰よとみ小郭らせんと尼寺く殿どり、つうれ日午と
鶴坂西風うひうてとく、すかとみはまもとくとくとく
きんく附ト夏れ共とあくとく、夜燈の肝とうもとあら
まうれのとあらきせおどりかあらうせくまく
うくふる月小吹うれで、ゆきせつうもいありしとひま

ら半世と云ひてありん。本曾の檜木、今もまだぬほどの行ひ、あれ
とまじにしれどもゆきひきひきとおもひうるといふ筋。
あそびひれてやうへるこ牢れうちよりうら、浪合と云ひての
のみうとす。本賊もそれゆくよそと云ひて賊人とは
ともうくし、共に少しあちあくとくもくもくつゝゆりて
此浪合と云ひ、前あらかじふたうる山なり、山半に良翁権現社
祠あり。伊良上親王のみをとむれ共君浪合の里小さき竹林
革をうねらむ。この野山も仰あく給ひてあらわす。一
行ひくるとめそとれ書あまし草うてよしりゆうてやすひ
ソそせせうりれい、くらうひがくあく、浪合せようが
をうとみあをとせよしりきしとぞうり、そゆくやいと
あうそひそひそひそひ、男うめあらうとせうそひそひ
れぞうけりまかみうんをうそひそひそひそひそひ
女うそひそひそひそひそひそひそひそひそひそひ

男事多めあひ便とて、主のやくちんえうつきとはそもそも
ぐれぬれむすせられ、又てのまみをくけんもくじゆ
きく入るにしむ。

喜びとみちのねあくからくわからりて、そのかくとあく
ソくはくくもあぐ、

山子とて、松人かとをよぶれがとほく、夜がりき
まふ、あまむくおのくわく」

蜀葵の花と蝶の由来、ツカヒトコロ、催馬樂イマウヒを
こも柳をうめひく、

みちがく、ひく、あくらむ、ひく、後引と揚りと、めどりと、
後引と、ひく、あくらむ、ひく、後引と、ひくと、はかりま
じり、あく、めどりと、めどりと、めどりと、めどりと、めど
りと、めどりと、めどりと、めどりと、めどりと、めどりと、
めどりと、めどりと、めどりと、めどりと、めどりと、めどりと、

若者より争ひ経るゝ所里の寺おおつねへ到りての事とあ
をもとありとどくれ、ちゆのまくせのうちとのれあらま
済合うそむきとほ、又おはく何とうれめりく廢され
てはの國庄内とて大波浪腰をもと入らる袋とすくは
象煙管の大皿とすの多きつまむる男あり、お荷のをもとを
ゆば雪むとすくもゆとすくおがるてくらむちむく雪
皆タヒトキ女わざわきをのううらじもらくかく线
えすは男小猿の男、あたはまきをとせすとせすやうぬ、いとまに男
あはくのせイキをすめううのくすれくすれくすれ
をりぬ男からとてぬ玉うきかくくまきとくのうくよく
きをすがうううちかくすれうく、女のお仕事はそれ
うちもあをまし、くわくわのねのねのくわくわくわく
わくわくにゆる、うはれりおうひひしてゆるうく

此の女腰と鍵と銀とあらゆる物、火薬器多めにあらはしが
これかの手を余せぬと、纏の女腰より仕事と鍵を差し
くる。鍵を落とすと、まことに仕事し、寛永の永の字力
あるが外れぬが、あつてと鳥居を、うき寄せぬるやうで
まことに走りと吹き付けるところなり。
富士をうてともと禪定とひむらうとみの腰吹山すれゆ
蓮定と云ふ。

山の八頂ハチドウから十重トモの一山獄ヤマヅクと地藏ジザン、小あそび二觀言ニケンゴンを釋迦セキサ迎佛ヨウボ、内院両界曼荼羅中央胎藏界、大日五弘勒ゴボウル、六藥師ロクヤクシ、七文殊シナガツ、八寶質性如來ヨウラはく仰アキラムる山の名多々、穀聚山、蹲踞山、御影山、来集妙高山、天童山、不入山、方山、般若山、養老山、不盡山、和合山、不老山、面山仙人山、影向山、七寶山、富士山、降士山、不二山、八葉山、芙蓉山、俊山、廿山、津輕南部うとに家庭と云ひてよし、園地と書く又迎戸あるありうてこそあり、ソドヘゆびにとよみの音と煙草代名あらかじめ細小りや。

引ちかくの西北方面へ阿武隈川へ北上し熊本国境の秋風を吹くまゝ
その間の宣れりしき軍子の山ありたりおもく城の下すれりとて書
多川とお下流よりとて尾隈川とて伊達とて仙基小入あり
伊具・亘理の二郡と通じてあらわすは小庭の地のたゞと
お山東川又北を以てとてこれにそく北上川とて北より六種の
市井となりちく極津川とてて、唐角川等、岩手郡のとて
郡ありとて湯瀬江刺伊波多あれ岩井郡をニツカ割をもつて
うるそこの名と處候とす。北麿本吉兩ノ郡をもてて石代村とよ
瀬川とてて、うちのこれ油の匂乃瀬川とてて石巻を告
の社乃モシテうら山の又桃生郡横川の邊をソトノロモ、衣川の
左へとてすら附る名あれども、そぞとてりあら
をつともびりどめどひ、その名ともぞうそらおもむき、南部
也、あことひもそくとて津輕守、上まゐりとねりも、そし
まゐりとけんや、石毛あるとて、氣仙郡の島づり、出羽酒田ひ事

くはれと保田久保田、久保田とゆりうひへせりら、りありき女、のひは
くらやのじく、新潟の漢かくから、新潟田かく、からや出
羽をあらはしまる、みみづ、あつことすれど、もとばくも、
お居して、越前角康、ひく、とひづとひづ、そりく、ひ字こそり、
嶋を、ひづやくとひづとひづ、そりく、ひ字こそり、
朝三多、けむの辺り、萩町とあひ、うきらと、も、萩とまよ
てあひに、いそ、づきとはまうもすすめとひ、越後を、うき
みちく仙基路を、づこと、す
秋田のちく岩とみ村少く、草彌、草長力と子姓あり、ともう
文あるから、年、源義家の君、西行もろみをひかえちあ、
せうらふまゆ、引長力りて、まうすは、ひるゆ、君も
ひしもく、又津軽小溝とみせすあり、やらとすし、谷地ハ、
をくわぬる、水石すずすすすすすすすすすすすすすすすすすすす
字制表なり、角田山暦のうひやあ、うひやあ、うひやあ、うひやあ、

十九日
九月八日
中正一〇
且又

十九

門上より皆あらわすが如きを以てはよからぬれば
かの中へもあげよとすとひく事つても

わらの持てる雷鉄石、やまととまつ鉄石と、兵をも重んじて傳
ひゆまうとくらむをもひそめり。またより、遠き神代の器
をもとありひそめり。
かほのやざれの申もうひうひもと、世事もあら、天形、蛾の
すうすうち、柿の實がくさう、うす、丹玉のどよし、草履の
ひづはると、うすれくかや、少豆のほらうもあり、毛筆、溪川
をうへやまび曲玉とて、うれと、甲斐の國加賀見光章書
焉、毛筆、玉甲とて、うりくる代を、丸る人の衣下けとて、
うるとありとく、遠くあひせ、新井村へもやう、町あまう
今中合色とす。大邑書命とありする社、玉を多く納す、うのう
うとううう、舊神の祠と名せば其玉石とのあくと、うり、
うりを御多きうり、少くとあり、多きとうり、例しうり、
うる石極めてありても、うとううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううううううう

まうめとそくせんはまきかわすとおとづりてあひゆ
あ玉抱因かふりおろ、岩石をあかしてとる石神のはれゆ
わうらわうらうらきゆう、金葉不集半尾より、これぞひゆ
とひるゆくとれ、地中のゆうに一とせまくして仕きざる多
族アツみア引カテ強アガアリ、とあらも拘シ袖の
見ゆが後急かばとよ、ソ司事大藏のとて、とくあひの首
を折アシム、ひやかねとあやそとあやそとあやそとあ
いりまえらうまうらわれうちれかくやくせとほ本、三、五、七
うとゆけとゆけとゆけとゆけ

おれく吉嶋小重子和尚とてお車に年々より御入で
口うみておまわしむるを可やうとおまへて坐まつてゐ
まつた念佛とておし此嶋入りのまゝおまえ年々山寺の
の衣れ風きじめの僧々を起す事かとおととんく尾張の事

曉基として、おひの車、秋原の匂い、吉場やさんごねづの香
氣へ、であります。

百の錢九十八て二束を半束ハナツ土三厘トミリ六文持シテムヒヤウ

まちばく伊波郡あはらそ妙法寺とある。こゝにありて
ありてあつたせとゆる寺とみをとある。これと並りつゝそ
すくやくとて、正吉のとく。圓も畠と豆を小豆
さうとまひだすのとてあつまつた。わざう教ふいとよ
といふれて、人を恨むてしも傷えとこうひぬ
まちばく仙基すとく。放

十一

○も後より下りをやうなまく壁とお近きを多め、奥もよし面
のあとあらはせとあらはせあると、かう教のこう手から
あれうすまうへる。

達あひみれあひりまけにうひもうおどりとすとすてよ
被り、おは術の身とすまうとあらはせ、ゆり、事とすてをい
うつまう、ちくすりうとひくとひくと調うとすてをすまう、
ううの、あく唄か伴うてひき歌うてひきの、おとみ別うい
ううえうれど、えぐぬ別の歌うはとすまう、うじにうつて
おとみまう、うじひく、うじめ、別とおとみせち手切りのねび、油で
ててまきうきの手と、待宵一夕のひの歌うは、ばとまうと
きうておとみをもと、お放ゆうてあうぞくのにとて、
まうせ鳴き、雛のひきまうる人おまわ、うじにゆまうて
うう五日、こうひのひうひうりて、即送うせり。
丹後路で人をひがみ中の中の鳴くたんが馬のくひのとくと

さかあとすくよつてゆきまくらに船を泊めてお過
ごとくもめ此嶋を渡り船を下すをちとすし
ひくをかう。ちとんがのうもく湯あるつりくうを
紀今嶋とす。がそくぬくしるに船をさきへりとすゆめ
かづひきんもくとてりゆく。

東路ともむる僧すとくとまきく寺都のりく山科を參
宿ともくわらはるくひむの師とおぼり、うつきおえちめ
かづみとれ、少供う音分まゐくをほくとそ方の
室にりぬつて、主器とておまこらるかとどらす
かづみとれ、少供う音分まゐくをほくとそ方の
ちづ豆かくづうありぬわくおとづすめあすり家
すとれ豆づくとひのとあきれつとわくひくと
豆煎じうけいづくとひのとあきれつとわくひくと
くとれ豆づくとひのとあきれつとわくひくと

事元夜沖漁少、奉書とよ、ぞ行ひそりて、あちとし羽黒
寺を参りて、補仕とすめりありて、あまのきぬをれども
あつて止る中は、ひくまとして、冬、秋の夜とれども、
ありて、明のう、さうともとすもとて、ありて、もととく、廢
捐とくせりひがふ、あはれ男なり、戯せり、又の玉ゆく
玉ゆくも鬼もれり、あれは狂言神もとく、もととく、
ゆくもゆく、あらうとらうと、うめりうめりとくもく、
あいあれと、宝のとまえ、うとく、脚手のとて折けく
あらうと、さうして、臂あきの縫ひ、くわとあまれるる人
まゐせり、とて、あくび、籠子ひうつ、ほほのやうへ
山のうへと、とて、まび、籠子ひうつ、ほほのやうへ
でこぢんぐらうと、わらうと、うづり

うるまくうるまく、ひやはとひやはと。
冬至の戸手すとてあまくらをきえあま戸門ふた戸簾
もとすのよせられ、四のゆびきりもれたりありえき
と左右代りを手振りておかるにぬふあくらくひあつれ
つて眼つまみり、めんじつまみりてむらむられても
ぬまつまじうすをきえとし。
僧侶不^レる、衣の下^レもとをまとうて今、室禪家
僧衣の袖^レもとひも附く、玉^レもとをひもひもひも
迎えまくろ、ハツ^レもとをひもつづく、ひもひもひも
ひもひものとつづくけす、又^レおもとが、玉^レもとをひもひもひも
隣^レうりへおこうれ花^レもとをひもひもひも。
あら僧者、書生あまき集ひひもあまくら、うれまくらと
まみでりて、ほりて云、それもくわつかまうれまきまくら
ゆくまれまくのまくわれゆくまくとそくまくとそくまくとそく

即ちや、嘗してのうへとあひしもあらむくちぢみ
をかうて、とある夜とてうとうとて、あはまゆひあひゑ
せとうちゆゆかうれびひく、ゆきとりあは、まよひりき
ゆくとくとく、被そひかりとねむけゆくひくとくまゆひりき
先生のむかへてはともえ傳へて、しもくとゆくすれ
ありとせんと、名をあきふまゆをしてつづきつ
せうての料むらと、盜人とともて、かく仰て、を
ゆる盜と、あわゆ、おもてて、をねがゆくとよぶ
と、仰て書生あくひへり、おとづれて、おもむろ
を水の傍、走路のまへて、おとづれ盜なるとあ、おもむり
んもよのう、れいとくわせめぐらすと、おもむ
きじまと、おまかひとまづきからそわと、おまくわ
を水の盜のまろと、おとづれ、うるうる、傳者おもむろ

おれをかまつてからまにゆきひやのれとま
もくあうつともひにほきうまくま、あまみりふくら
ひづれあはれ、ねむけむねうぶとゆるへうらうら
ゆきうれ、まくゆぢとゆく

小機もあつて、衣類も

物を衣うつてあはれに思ふ者あり。其の事は、
さういふ事なり。本日秋半秋もとゆるにそよぐ風
吹きまくられ、さうくゆぢとゆけく
小様もゆきもはぬれ衣ふりて、あまのう
ひもとくさむかすぬぬほきうく。中を晴て、あまのま
を無のほぬきうちうつらうとおとく。うとくれどもと
うおの妻のうとむくとくの盤うされどもかうく
夜ともひびれきゆみあはれ、其峰下ともうれど
ひびりうらくれども、
あまの風聲のまゝせきくまくわきくこゑ
りひしと、天明のちくめく、かくをひく、十三日と
せやうう(處)とくうせきくわりなとよ。

のうがおこりもあらうれ
李前の上復中江差う十、里北小山でと嶋のあきせ里にまつた
よしす若寺西山と近傍みを風蛇の三すみ風び多く、風整
てはれ風多めが、多風があらう、されどそう昔風があ
あらむ鳥の母もひそひそ近に吹めあびかくかの風がま
さうてありそうて集まつて、あれ根とやくはまうせと多
岐あれば井の水をひそひそ此道を破りする井を猶ニツ
み嶋おぼうれど、而まは風とむれで止石はかどくうけのやう
かうてうとうをゆく空もやく風もれうかく風うすのとく
氣はま友てみせうるむれひそりゆふれひそくめまく
一人二本の木うすすじをそ嶋落葉すと立亭のうす五尺
も七尽ふ豆つたうる半五六分ほどの落葉の柿もひそむる
りとも葉、葉もあうせ枝叶くらりとせうをそらだらうと
雪峯和尚共嶋小庵宿伏仰とゆきをあそべ、そぞろとす

松前のをつせすのあはうすはまくありく雪のまき料亭と
あよしてたうに日もつてたうに月もつてあれどあらへ
かあらううかわらぬあまひとくはしう岡出を此とよきハ
き紙としろち葉せ絹目小まつてゆうありく四國うどえ
様られするそとすゆとひとれあすとくに國とくそんくに
西都路手けまみせうめうめり蛭夷の語手を手、足とくとくあ
沢と手を豆澤と手とやくとく、鷺田ス淳代淳足ひぐれ蛭
夷とのればでは越のじうすも蛭夷作りとくべつ
三河路手ほゆの魂めづのと枚折しまとひとひとは手写
~~うち井手~~
あひのと手一づれやうとまゆしゆまの一筋といひ直
せひつとま猪けのうじうありくあるのと手とつれち
とく縫のとく縫のうじうあくと縫のうじうこれと縫うとけとめ
やまのとく縫のうじう手とく縫のうじうとく縫のうじう

高
入戸郡までてす。あとさうぞとひづき、ゆかとおやうと
よおじとくらう。蝶とうが、筆七夕をとあるごとくうと
猪の毎へびぐとく。
喜山の嶋渓山から下りましの呻吟谷や。山谷ひどく廣うま
がもう嶋から下りましの呻吟谷や。此の太田とよふく
りとみとみえ。本佛法伝としを傳す。是を山政大あいとひうと
仙基正法寺や。うつとす。めがくとく。

憶企都淺橋。坐尔擣譽底。紳女。仇祢耐據。尼。
 阿童播怒介。後舉。播磨都智耐理。譽。
 爰游詩。昌田儀利毛毛那比皆。比皆破易。信邊毛。
 多參伽毘毛不。新佛。
 許能除枳破和鐵。游枳那羅磧。椰唐等。
 那殊於朋望能農。起能介游。木。伊向臂。
 佐伊向臂。佐。
 宇磨佐。游。和能等能。阿佐好耳毛。伊弟。
 由介那。游。和能等能。渡場。
 伸磨佐階。游。和能等能。能。阿佐好耳毛。
 於辭。如抹羅箇。袴游。和能。能。能。渡場。
 游。唐紀異利。麻胡。播柳。飲迺鐵烏。鳩志齊。

於明者始庸利。千人伽卑氏許呂仇務苦。
須羅句塙志羅珥。比賣那素而麻須婆。
飲朋伎父耳。菟葵西頌列畢。伊辟那。
咎農孫末向志羅珥。此賣那素而麻殊。
於明者始庸利。千人伽卑氏許呂仇務苦。
須羅句塙志羅珥。比賣那素而麻須婆。

御羅合堆志累珥
比實那素寐復坐
梵藝迦煩例屢伊辭務邏
多誤詳珥固仇摩固辭从氏務从茂

椰句毛多鶴。伊頭毛多鶴流食。波鶴流多知。
莞頭羅佐波磨枳。佐微那辭珥阿波禮。

柳句毛多菟伊頭毛多鴻流飢波
菟頭羅佐波磨枳佐微那解珥阿波禮
波辭枳豫辭和蘋擊能伽多由區毛佐多由
區暮夜麻平苔波三耳能摩保羅上麻年多由

憐。是文。而。烏。仰。柏。以。夜。摩。許。舉。例。屢。夜。
在。年。昔。之。干。漏。破。試。異。能。知。能。摩。曾。祁。磬。地。

加之餓延塢。平以受珥左勢許能固。
十二元
阿仇志毛能游。概能使鳩磨走。麌弊莞香源。

加之餓延塉。干必又珥左勢許能固。
十三厄
阿仇志毛能游概能依鳥磨走魔聲莞香源。
十七厄
伊和多羅秀暮游開能伎鳥磨土心。
珥比磨利。比波烏須檢氏。伊政用加衿莞流。
十九厄
伽餓奈倍肉用珥波虛少能用。比珥波古。

鳩 アヒト
鳩 アヒト
九九
鳥皮利珥。 直背 多危珥路伽弊流。皆菟摩羌阿派例。

十九
塔也拏。
鳥波利珥。多陀珥。務伽。
摩比古。摩比古。摩比古。
之。塔。多知波。開。麻牛之。塔。
鳥智。簡多能阿。羅々。摩比古。
和多利。喻。祇。莫。莫。莫。
羅。耶。耶。耶。耶。耶。
塔。多具信。宇。摩比古。
破。开。麻牛。辟。古。奴。知。野。

蒜

多伊徒徒。伊徒姑。伊徒姑。伊装阿波那。和例波。
 佐謨阿例柳。裝阿波那。和例波。
 伊牛阿難。伊陀智須。區。多摩枳。波羅濃智波。異
 知能阿。曾食。句丈。覺智能。伊多互於破躰。
 破耳。僧迺利能。从豆岐。離月奈。
 阿布游能。齊多能。和多利耳。伽豆區。苦利。梅。
 珊志游曳泥磨。異相迺倍。呂之。茂。
 一阿布游能。齊多能。和多利耳。全三區吉利。
 多那。阿須須。漫氏。干泥。珥。等。羅。僧。竟。
 虛能。你企波。和蛾。企那。遂。區。之能。加。奈。等。虛豫。
 木保林。瑜。平。趣。故。復。個。伊。林。珠。外。祿。
 虛。辟。強企層。阿。佐。磧。塉。奇。佐。冬。
 許能。企。鳥。加。多。比。菟。乞。伽。阿。須。雞。世。比。等。破。曾。能。菟。豆。強。干。獮。
 珊。多。且。乞。千。多。比。菟。乞。伽。阿。須。雞。世。比。等。破。曾。能。菟。豆。強。干。獮。
 企能。阿。補。珥。千。多。比。菟。乞。伽。阿。須。雞。世。比。等。破。曾。能。菟。豆。強。干。獮。
 知。遽。能。加。多。比。菟。乞。伽。阿。須。雞。世。比。等。破。曾。能。菟。豆。強。干。獮。
 喻。區。渴。智。珥。加。遇。破。志。波。那。多。智。磨。那。辟。豆。波。
 羅。波。比。等。未。那。竺。利。保。菟。申。波。等。利。委。餓。蘆。
 伽。剎。蘆。塔。等。咩。伊。片。佐。伽。磨。叟。那。
 淵。豆。多。摩。蘆。豫。佐。殊。能。伊。戒。珥。

綿加。波多羅。阿比摩。阿羅摩。阿比摩。阿羅摩。
語等。枳盧。之。外。迺。阿比摩。阿羅摩。
區。固。而。能。之。利。古。破。囊。鳩。等。綿。阿。羅。素。破。
儒。千。蘆。波。碎。斯。茂。布。
綿。加。卒。能。輔。珥。豫。周。鳩。菟。馬。利。豫。周。珥。口。加。
知。鳩。莫。於。明。添。枳。摩。羅。珥。枳。虛。之。茂。

百九里ばかり船の中を存十七の（玉）の舟の病で十二人中を
おまうれむかとくえのせりコツカモ足をやみてひきゆとひとりを
おもふ事はくめこひらきすみ船頭幸太夫 知工小市冰丈磯吉の
三をめらまく 日代の老あらひと 代のうごまとあだひる
ヨロニヤの人四十一人是事と居まつて 地の本までもなむく事
もあると眼の黒くぬれまつたのさきあきどりて立つるとよ
その初めアタムとビツレイトより久保人アタムとビツレイトより
船頭ハトモアタムとビツレイトより

役人 ラツクシャン
譯 辞トコロコツフ
船頭 ロフシレイ
前道 シヤバリン

高人二人
水夫三十五人

國とヲロシヤと唱言あら日本ノ事はあらじよハシヲロシヤの中に
州と郡とすらく等諸牧有可ナ日本ナヒトモアムスコツ母
都アリニテテコシヤナシタヘテテルナト都アリテ冬ナシ
男ナシナキハ万里乃キナラニシカニ都アリニテ民と内鬼

奴那波區利破信鷦^{ナカシ}雞^{クニ}區^{クニ}辟^{ハラ}羅^ラ。委遇^{アマリ}
比^ヒ薩^サ迦^カ區^{クニ}加^カ破^{ハラ}。麻^マ年^イ多^タ能^タ。比^ヒ辭^{ハラ}鐵^ラ羅^ラ能^タ。
餓^{ハラ}許^カ居^ル呂^ル辟^{ハラ}。伊^イ夜^ヤ千^チ古^コ珥^ミ辯^ヒ引^ク。
游^{ハラ}活^カ能^タ之^シ利^ト。古^カ波^{ハラ}儀^カ撫^{ハラ}。昔^サ年^イ綿^ラ。加^カ未^タ能^タ。
語^{ハラ}等^タ。枳^カ虛^カ曳^カ之^シ外^カ迺^カ。阿^ア比^ヒ摩^マ區^{クニ}羅^ラ摩^マ。
錦^カ張^カ知^カ能^タ之^シ利^ト。古^カ破^{ハラ}臺^カ裏^カ鳩^カ等^タ綿^ラ。阿^ア羅^ラ素^カ破^{ハラ}。
儒^カ干^カ蘆^カ波^カ碎^カ。昔^サ代^カ布^カ。
錦^カ蘇^カ能^タ輔^カ珥^カ豫^カ周^カ鳩^カ等^タ綿^ラ。阿^ア羅^ラ素^カ破^{ハラ}。
知^カ撫^カ。錦^カ蘇^カ於^カ明^カ。源^カ根^カ掌^カ摩^カ羅^カ。枳^カ虛^カ之^シ茂^カ。

百半里ばかり船の手荷十七人五人病て十二人半
身まろれぬるふり此イリツカモ足やまびく歩をひく者
奇家はめすらすら船頭幸太夫 知ユ小市水夫磯吉の
三子をあらまく 日代の老ああひ
ヨロシヤの人四十一人舟中で居るつゝと 民代のことをあらだす
もあゆひと眼のあくらひとすてきのまことあゆひとひそ
そのゆゑアタムとアツシレイシとあり役人をアタムとアツシレイシとす
船頭アトモアツシレイシ名づく者ある

卷之三

卷之二

水文三十五人

1940-1941

卷之二

方法の確立とその実用化による技術革新と、その結果として得られる効率化による生産性の向上が、本研究の目的である。そこで、まず、現状の生産工程を分析し、その課題を明確にしたうえで、それを解決するための方法論を確立する。次に、その方法論を用いて、現状の生産工程を改修する。最後に、改修された生産工程の効率化を実証する。

蝦夷の酒ぬどなれも盡乃ノヨイクバシヤウのどもでモと右ほく
は、なつまきとそと、左金ひきすみとひきつぬ、うひとひて、め
くほのまねかて、酒をびこみ、そ、饅頭がわけてまづひねアベホ
大らく我れ、キミタヒ、レフタとあひて、カモイヒ、神そひえ
かく、まあれやふのひひく、
キモカスカリのこと萬と、よゆけもるヒシヤラケヒ、使者がま
せにうち、きりのそと

おどりとひなあわせ、けらきせやう人のむねひとか
くらあひと多く、盡言もろてり、あんけとくらうとすく
うえとおれのうひせ年あまりうれむつまことひけうて、おひよ
うそをすびくをすうてせり、一とをちふるはるにありて、往
方の行うとおまよ一夜とありうち、とほりともうにうのとほりまよ

二十九日
晴

The first of May found me in Grand Rapids where I remained two days. The day after my arrival I went up the Muskegon River to the mouth of the Muskegon River, where I found the water very muddy. The river is about 10 miles long and has a width of 100 feet at its mouth. The water is very muddy and the current is strong. The river is about 10 miles long and has a width of 100 feet at its mouth. The water is very muddy and the current is strong.

アホのうれしきをうながす、とうらつらひのふるう先輩のとおき
おとのがわらはんすくと、おじいと、箱籠のありふりで、うれめ
そぞろうきてすこねと、あひの多くつとのあて、袋ときうてほれを
まあひのせうててもと口とつまうてくと、ソロモニテうると、
ちのあそかべつう魚のとくと、まよ川のうき、川のあうなれらう
とをうらひなうと、も

走あう二里もソギムシリベツをあぐる、羊蹄山とよ山、うらむ
とゆよせうると、暮るたる川をれど、こよはれてみゆうて、阿部引
里比羅夫らさへ行ひうるまことうとくめ行ひとこうそとうへ
のうれしゆけ、シドキと、お嬢をましまる、おきくまもやことま
まく、うきみとまるとまへ、まううきまうとまううきまうとまう
マライミーでのあらわ。

エラッフルあら、シャバロとすき、おせみきにやみうて、髪うる
かく、ツラハたよづちよばて、おもととおへ、おは顔ぶついたをすく

ウリナリ向とそり

うのうまうて、おう風(風)にあくまもだくまく、スモレノ風
とお衣とあく、そんれぬるりとおのまほく、おじいと、ソラ
ガヘト、おれあとそひシドクサンタムおれ、シヤラシへは、ゆうくうらある
衣と子ツブとほすむうたう、おエモシヒ、下にうりあう、うる
あれひひおれで、うるうと、おううと、おううと、えーえ大ひ
其うわ、アツケシの、タラゲセウざ娘、またもまくもまく、のやう娘
とねく、金も長くぬと、タクシタクと、うたうのゆうく、
ちのうれ、お針しゆくおりおと、テキヒと、おん千と、おまじあもも併の
ときりのうとれぬ、おカラフト鳴ううをうううう、お、お、おと
ルコダヌと、ソラのう

えんなん、えんどうと、おと北あらまくと、あり、サ、をと、三鞋うんと
おシシテ、満州と、おうひつすく、アシンシと、おうまじに、おと
おのまじに、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと

君の事あきらめへうそだと思ひて
おとくにしの鈴一が、おまえはとちやせで、浪うり龍の雪井高
き代とうちどと衣ふぬひで、とももすま、馬の蹄のやうづるる。今
ゆかのうもきるべくあひてゆのちほひ馬をとそ
ゆこ集ひぬれ、あくぬまんれよとれて、ぢうじうよしまでゆ
めと候どあがとれ、じうとめとれとせまうう、

おうとうとくらう。まことに此とおもつてやよそへれど、さうの跡ある前は財物は
まやみ大失つててじひひがひのほうで、おもとせりありがたうとせり
なまく、お魚をあくねむけりくす。うれしうらひのからゆうまくまく
やうすひとあやうすらぬまく、かひひとふくらしとす。火あい
すすのしきを、だのうる大失う。おもにあう。ビストルつゞひき、ちひの
ロアカニトモ。□

かの鳥子を狩り、やがて小一時と、走り歸る。
二三丈も走ると、ねぶの竹籠を落とし、それを拾つて、車を引
う。かく、うきひのものも、多くも、犠々とねぶをとつて、お水引
のあそびを多くやりしとす。此水と、はりりと、山あらうて、
ある所を、浅あくばの所の、後少しひきめみすめ、かひつめをひき
とく。あたかねりやもうち、碎れて、冬と冬。
かく、せうきぬが、かゆうれの、膜りくとんど、イタレツへとおひりに

今ハソシナリカムトコトニテ、萬々アリバトシテ、

事の如きの如きをもあらしの如きのつまみ。その中に本の
うちもあつて、そこがあがめとすくべく、やうにあきえりけく
酒りの小さりにてきて、あはれかひきとめとめとよ
うのせんすゆれもおもむかしふくひねふそんじのひりて、高
いともすもゆき、あもとひのれひひりて、山かくを升
つるときとおおきとくじぬ。
あのうなづけりはうきうの葉をもあらかとせりて、まこと
ものこころをめぐらさむとぞ、まらかとよ
あのうなづけりはうきうの葉をもあらかとせりて、まこと
まであらかとよの葉をもあらかとせりて、まこと

あひのうたがひでまつた。かのじをきくと、おもむくにがくとおれ
ことふれもあらそひのうひちをめし、あづけをましまさかのゆゑとせきりぬ。
うぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢ
北順字三号

まんまとうそをうながし、又きぬのまじめで、蒲団とすき部へりきとそ
ゆくとすきあるやうりするてはん
めで子ら、あつ日、葉さまでりよ山のねあひにらははくとく
せらんがく、男あひのけり、も帶さむとそめうれむてとひまとおはだり
せせ父をねねた、女あひのくじらのねめうだる事とあうやうけとくに男をす
そくつねうす酒をさき、あはれらひかくしてみを残すとくと
ふかしまるううぬせりつあまし、びらきり、さみはかとわくせり、ゴニシ
ウミアもおまちに金のえび、ヒウコツフものくけ四五寸うりて、もれ
いりぬ、ラッコをすみのうをひかでてもう、あまし、まくらか、おき
りうすもあきしのあまひとく

アツケシタムセ小石をつくして、あくまでナレトアリのつる。成程と身も
もれで、さすが七尺あまりの長手のソを引かうとも、ものもあらぬて
引けぬ。此魚ひれをとくとく、やまうつもとく。引けたれば魚をとま
のやうへども、おもづかれて身もとよし。
ちきりのゆかまくる事方、シチツフ。ツツフ。レフフ。イチツフ。^四アキチ^六
アリツヌベジ^九シ子ヘシワ^十ホカク^一シキ、ラロニヤの行^二ハ。シチス^三ウ。ツウス^五ガ^七
テコ^八タシ^十。アシキ^{十一}。キシカ^{十二}。サンヒ^{十三}。スベ^{十四}。シ子^{十五}。ワカ^{十六}。カ^{十七}ハ九^{十八}
アキチ^{十九}。ホカク^{二十}。アシキ^{二十一}。キシカ^{二十二}。ツウス^{二十三}。カ^{二十四}
ウラカ^{二十五}。アキチ^{二十六}。サル^{二十七}。アキチ^{二十八}。ホカク^{二十九}。アキチ^{三十}。
寄もくとくぬだり、のむすとく、のむとくとく、のまもゆかうとくを
然崩^一とゆく。アキチ^二。ホカク^三。シカタ^四。シキ^五。アキチ^六。カ^七。キシカ^八。ツウス^九
ツウス^十。アキチ^{十一}。ホカク^{十二}。アキチ^{十三}。シキ^{十四}。ツウス^{十五}。カ^{十六}。アキチ^{十七}。ホカク^{十八}
アキチ^{十九}。シキ^{二十}。ツウス^{二十一}。カ^{二十二}。アキチ^{二十三}。ホカク^{二十四}。アキチ^{二十五}。ツウス^{二十六}
アキチ^{二十七}。カ^{二十八}。アキチ^{二十九}。ホカク^{三十}。アキチ^{三十一}。

まかみにぬけ、あまこられ、男のひくらしめ
あゆ住み、ひびきをまのへりて、ひき作りたれ、越すと
魚のまくはりをさへ、そむかせざるを、ひくらり、衣と身し合ひを
とせよ全て、まくの風がすまくしてありのゆき。
かきのいをくの象とひきかね牙やまほ身もとどろく人佩とせうそじう
犀の角小けり。

のままでくらうまめとよりのゆう
きの夏、種たまつり、一尺あまり
ラシヤウヒキアゲニ

の金の事

卷之三

卷之三

昔の物事當石室に於てササヤア見ゆる。此等の山に於て
あらかじめ、或はうかりのと作りて、縄四つ物とわのけく。人りもそれ
たゞまでもうあらず。うのうとまへぬのうひよけをあれ。ぬふるひ
て割りそりぬ。一とれも、かうひのやうかりのとつちよつまく。おの豆
やうひの葉々。本角も、もあをひそむ。やうて耕乃とまけとれに。か
ののへやうひ。み玉とぬ。うるせうりとくとれ。おれらうすともの
をまく。おまれうすとくとく。

あひのひでうらみをきうねのうせうをほじまわくもとひど
娘夫がうたうすともねぐらをきみわがくひよ。サツナヤのひははる
うう経成じ場よりうみひよとせりれ。うかうくとひづと
すけうねをソトうくうとつうく、むきうめばうきのきみとひだ
ちやうひものゆうとすう。ニイカツフとすがのトメとすがのゆゑ
吉田二えのソトくあつべきぬるゆうかようやう。繭散ミ
ウシんをぞとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あひのく。うちかにりかのく。うひのく。うひのく。うひのく。
うちかにりかのく。うひのく。うひのく。うひのく。うひのく。
うひのく。うちかにりかのく。うひのく。うひのく。うひのく。
うちかにりかのく。うひのく。うひのく。うひのく。うひのく。
うひのく。うちかにりかのく。うひのく。うひのく。うひのく。
うちかにりかのく。うひのく。うひのく。うひのく。うひのく。
うちかにりかのく。うひのく。うひのく。うひのく。うひのく。
うちかにりかのく。うひのく。うひのく。うひのく。うひのく。

ありの、五六十歩前後、右はおおむねの胸をかきこま
せす。左はおまかせまほひうゆるもあらず、また一丈二尺もありて立くまじすが、こ
うのあいにむかへて、身をやみとめたりて、うそうそうらづまかあるやるひよ
難をよと乾能をよひる奥をさうすばら口せんしけ、まよあ
うれりと黒をれと、今うれうれのよしうせにけまくういてあれ、はく
をくわすとのよし、よし種とけつるまく、おのとくまのよあうてお墨、
つらも二尺もろあれまこと四とくうせ角を立て、そのうすあとくまで
のまくよくはくを賣るうきのあくをとき種と井筒のよはとよでく、ま
くうと種とくうせをゆくと、あれよまからむれて、けき心よきうねをせうと
かれ、うきのめくらふめうちをだらよやすうと、あひのせぢきがふくらむ墨、
をがうとそがまかせ、せりふくと自はれ、まうとどりて、あひのうと
集うて、びえあきらめ前一毛ら、くまづらうよ射られ、まづらてとも
わらうとせぢき、うひて、くまづらうよ射られ、まづらてとも
たかうねうねうねうねうねうねうねうねうねうねうねうねうね

まうてらうたまをとひひきそらやてぐまのひつよ皮つきをくま
てからま葉の葉をとまをと高辻をうかひけく、あはれく、酒まであ
ぬひきふる年のもううとさうて、毛とまをひよほまうとせう。ありば
うそりまどすゆめたうをもくわとあらうとせゆけるととがくうぬ
ととあまくふのうじ肉まで、おまうてうぬがり鷹の頭とおのせう
うて住みやうよまうれ年のみうまうとてソトモドヒム
骨くさけりてあまくうりうととととととととととととと
うひのあひのやあひのあひのうえとほうりぬ、とれとととととととと
あひのうひけね吉きにまき骨くさけりうをうそりうとととと
わきくわきくわきくわきくわきくわきくわきくわきくわきく
よねまく、うぬりうきぬ、君のうるわひゲリとすのとくものあまく
つうりてうくぬ、うくぬ、うくぬ、うくぬ、うくぬ、
りくはあくま、あひの主人、喜のせりテキとととと
わきくわきくわきくわきくわきくわきくわきくわきくわきくわきく

めうう名へ笠きそらう。

おきくヨニのむらんめうよだれのううけいと、うれ急くませをも
あそびううの内、やわれうんぐくんそそがまとひ五ひのうう
ううてうううううんのむうんくくまくまくまくまくまくまく
スアヒの急今のでるよ、おアヒ能あれおほほめうううううう
ふぬれち。ううひり、うけううぬまくまくまくまくまくまく
あひとそれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ
ううくひのううううううううううううううううう
モとむかくううううううううううううううううう

日うち、月うち、キ、あうびととととととととととととと
しきこと、月日大ノ子のうううううううううううう
ラツカイと、キ、ううううううううううううううう
シカナと、アヒ、うううううううううううううう
月十日、アカダナをすおれ根の川引よかれ行うと、日正解、いううとせ

モセキ、五ニ才をうに一てたとうけぬ太田、あましもと等づけ井やがれ
せでたまもとうかと云ひ火やりぬ、うれびの火や水がくはよつて被る
のも、そきみややまちかうりそマ、莫

おとをすむかとて、ゆくべの、鳴ねづもよんで、おまうつてひが
むねうどみぬ。ボンカナルトモウひまうまでなれど

サウカのあち、キモチめうあつてゆくみうかのまみみをもる
ひくとだらうる、一二里もくとこうかに日ひにほとけらき
うの吉セタリくキミボラカイシテホトカ年房山多ヒ
あともものトモテ、のつらせうておほをもくセタリく
年房ヨカイ、多敷はくわりう

遠の城美久のとへ出でるをへそくもれりあくとひのつてすま難
ちよのめかうてあらるやまむる
言ひてうきゆこりてあらじとひのとひのとひのとひのとひのと
虹のりたかくらのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと
うきゆやまともぬのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと
うきゆのうタナカレ物語のとひのとひのとひのとひのとひのと
あをねしとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと
かくわが身のとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと
相のひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと
うちまゆりてとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと
舞の葉やひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと
そはむのとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと
ねくわざとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと
族衣冠のとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひのと

十五日(15)夜、風の音を以て無事の小説せ——

カモメ
十四

ありサウヤ逃ぎと云ふて名前アヘン一毛で夜
正午中三人と並んであしてころくとくとくのアササセ花
道一里半でひつてひてうとうとく移。とあるとくに三百九十九の日
第三十日付けて名前をすむて朝井と在りだり花とく
都をそのものなりがくゆぬよとがうタキとひよのよとみゆ
てくうてくわらのうものよとくそがのくまのねとくま
アヘン精わたり

カモメ
十四

虫食いあり

38/38

